



Title	日本におけるシンガポール人留学生の多言語混用
Author(s)	Chew, Amber
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2021, 17, p. 64-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81765
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本におけるシンガポール人留学生の多言語混用

Amber CHEW

【キーワード】多言語主義、言語混用、留学生、コードスイッチング

【要旨】

本稿では、日本に住むシンガポール人留学生同士の談話データを使用して、その多言語混用の実態を分析し、日本語という第二言語が自分たちの言語実践にいかに取り入れられているかを明らかにした。

シンガポール人留学生の会話は基本的に英語がベースになっており、そのなかに日本語や中国語などが混用されている。言語混用のパターンも非常に多様であるが、本稿では、発話のなかに混用された日本語に注目し、「語レベルの日本語使用」と「語を超えたレベルの日本語使用」の2つに分けて分析を行った。その結果、語レベルでは、名詞の混用が最も顕著で、日本語の動詞や動名詞に英語の屈折接辞がつく例も見られた。語を超えたレベルでは、主に話題に応じた言語混用、引用、評価、ツッコミ、あいづち・感動詞、修正・限定の6タイプの言語混用が観察された。また、本研究のデータでは、インフォーマントの間で言語混用のパターンに個人差がはっきり出ており、話し相手との親疎関係や、言語混用の個人的な習慣と許容度などの要因と関係していると考えられる。このような結果から、本研究では日本のシンガポール人留学生の多言語混用のあり方が一律的なものではなく、多様であることを指摘した。

1. はじめに

日本の大学で勉強している留学生は同じ会話の中で、日本語や自分の母語など、複数の言語を混ぜて使うことが珍しくない。シンガポールという多言語社会で育ち、もともと日常生活の中で英語や中国語などいくつかの言語を混ぜて使うことに慣れているシンガポール人留学生もまた例外ではなく、以下のように会話の中で自分の母語ではない日本語を混ぜるケースがたびたび観察される¹⁾。なお、<>内は、筆者による和訳である。

- (1) (AはBに自分が眠くて仕方がないと話し、BはAに昼寝の提案をしている。)

B: You can 昼寝 at my place.

<私んちで昼寝したら?>

A: Cannot cannot cannot.

<ダメダメダメ。>

B: You 二度寝 ed though.

<でも二度寝したじゃん。>

- (2) (CとDはDがスタンドミキサーを買ってもらったことについて話している。)

1) 用例の文字化の表記方法については、本稿の付録資料を参照。

D: Yeah I mean, I wanted one I got it so hh

<うん、まあ、それ欲しかったし、買ってもらったから...>

C: Mm hhhh

<うん。>

いいじゃんいいじゃん.

(1) では、B の最初の英語の発話に「昼寝」という日本語の単語が混ざっており、そのあとの英語の発話に「二度寝 ed [nɪdɒn:d]」という、過去を表す英語の屈折接辞「-ed」がついた日本語の単語「二度寝」が混用されている。(2) では、英語で行われていた会話の途中で C が日本語で「いいじゃんいいじゃん」と言っている。

本研究ではこうした多言語話者であるシンガポール人留学生の自然会話の中の多言語混用を分析し、日本語という第二言語をいかに自分たちの言語実践に取り入れているかを明らかにしたい。

先行研究では、2 つ以上の言語が混用される現象に言及する際に、「コードスイッチング」「コードミキシング」「トランスランゲージング」など、さまざまな定義や理論が含まれた用語が用いられている。本稿は理論よりも実態に注目することを目的とするものであるため、上記の用語が指す現象を含め、同一会話内で 2 つ以上の言語が混用されるすべての現象の総称として、「言語混用」という用語を使用する。

以下では、2 節でシンガポールの言語背景について述べ、3 節で先行研究を概観した上で問題のありかを提示する。4 節で研究の概要と分析方法を述べたあと、5 節と 6 節で分析結果を示し、7 節では分析結果から考察した内容を述べる。最後に、8 節では結果のまとめと今後の課題について述べる。

2. シンガポールの言語的背景

シンガポールは東南アジアにある多民族国家で、約 561 万人の住民人口のうち、中華系が 74.3%、マレー系が 13.4%、インド系が 9.0%、その他が 3.2%を占めている (Singapore Department of Statistics 2017)。多民族が共存しているため、シンガポールは言語的に非常に多様であり、国に制定された 4 つの公用語 (英語、中国語 (北京語)、マレー語、タミル語) 以外にも、福建語、潮州語、広東語などの中国語方言、ヒンディー語、パンジャブ語などのインドの言語も話されている (Ng and Cavallaro 2019)。

さらに、シンガポール人はカジュアルな場面においてよくシングリッシュ (Singlish) を使用する。シングリッシュは、英語、北京語、中国語方言、マレー語などのさまざまな言語的要素が混ざった言語であり、アスペクト体系や主題の優勢 (Bao 2015) など、中国語式の文法が英語に適用されるなどの文法上の特徴をもつ。本研究のデータにおいてもシングリッシュの発話がよく現れるが、便宜上、本稿の分析ではシングリッシュを英語のバリエーションのひとつとして扱う。

3. 先行研究と問題のありか

3.1. 先行研究

シンガポールにおける複数言語の混用（特に英語と中国語のコードスイッチング・コードミキシング）について多くの研究がなされてきた（Tay 1989; Kamwangamalu and Lee 1991; Lee 2003; Huang and Zhang 2018; Sumartono and Tan 2018）。Tay（1989）は英語、中国語（北京語）、閩南語、潮州語のコードスイッチングとコードミキシングをコミュニケーション・ストラテジーとして分析し、多言語社会における多言語使用をひとつの独立した言語体系として見るべきであると主張した。Kamwangamalu and Lee（1991）は、中国語と英語のバイリンガルの発話において基盤言語（matrix language）があるかどうかを調査した。Lee（2003）は、中国語と英語のバイリンガルのコードスイッチングの動機付けを分析した。

また、日本語と英語のコードスイッチングについては、さまざまな視点から研究されてきた。Azuma（1997）は、日本における日本語母語話者の日英コードスイッチングの語彙的特徴に着目し、日英コードスイッチングの統語規則を分析した。一方、Nishimura（1995）は、社会言語学的なアプローチで日系カナダ人二世のコードスイッチングの機能を調査した。

なお、外国人同士の会話に現地語が使われる現象を扱った研究がいくつかある。Ikeda and Bysouth（2013）は、日本の大学に様々な国から来ている交換留学生の言語生活に着目し、多言語の言語環境においていかに使用言語を選択するかを調べた。その結果、留学生はリンガ・フランカとして主に英語と日本語を選択して使用したことを明らかにした。藤村（2013）はイギリス在住の成人の日本語母語話者がイギリスにおいて日本語で会話する際、日本語と英語の間でどのようにコードスイッチング・コードミキシングをするかを調査し、その使用の背景にある要因を分析した。藤村（2013）によると、頻繁にコードスイッチングが起こる際には、会話の参加者の間に、前提として、複数の言語能力とそれを使用する環境を共有しているという認識があるという。また、陳（2016）は中国語母語話者の留学生の会話に生じた中国語と日本語のコードスイッチングを統語規則の面と機能の面から分析した。

3.2. 問題のありか

これまでの研究では、もともと多言語話者として育ち、大人になってから異国に移り、自分の母語でない言語を日常的に使うようになったケースについてはほとんど扱われてこなかったのが現状である。本研究で調査対象とするシンガポール人留学生は複数言語の混用が主流だった多言語社会で育ち、大学進学のために日本に移り、日本語という外国語を日常的に用いるようになった。グローバル化が進んでいるなかで、今後、シンガポール人留学生と同じように、もともと複数言語の混用に慣れている多言語話者が別の第二言語を習得し、その第二言語を使用するコミュニティに移住するというケースも増えると考えられる。そういった多言語話者の言語実践は、これまでの研究で扱ってきたモノリンガルが第二言語を習得したケースや、幼少期から複数の言語を習得したバイリンガルのケースと異なると考えられる。そのため、シンガポール人留学生が日本語という第二言語をどの

ように自分たちの日常会話の中に組み込むかについては、その違いを明らかにする上で考察する意義がある。そこで、本研究では、以下の2点を明らかにすることを目的とする。

- (a) 日本の大学に進学し、長期間日本で生活しているシンガポール人留学生同士が話す際の多言語混用の実態はどのようなものか
- (b) シンガポール人留学生同士の多言語混用はこれまでほかの多言語コミュニティーで見られた多言語混用とどのように異なるか

4. 調査概要と分析方法

4.1. 調査対象とデータ収集

本研究では、日本の大学で正規学生として勉強しており、1年以上日本で生活しているシンガポール人留学生を調査対象とする。日本語の混用を観察するため、日本に生活基盤をもち、日本語能力試験のN2以上をもっている人に絞った。調査はインフォーマントの自宅や筆者の宿泊先などで行った。より自然な会話での多言語混用を観察するため、以上の条件を満たす友人ペアにテーマを設けず45分～1時間自由に話してもらい、録音した。

調査の協力を得た4名のインフォーマント情報及び談話データの情報を表1に示す。各インフォーマントの情報は調査時におけるインフォーマント本人による報告である。

表1 インフォーマント・談話データの情報

データ	録音時間 (分:秒)	調査 年月	ID	性別	調査時の 年齢	話せる言語	日本語 レベル	滞日年数	日本語 学習年数
1	48:19	2019/03	A	女	23	英、中、日	N1	4年	4年
			B	女	22	英、中、日	N1	4年	10年
2	53:26	2019/03	C	女	23	英、中、日	N1	4年	10年
			D	女	23	英、中、日	N1	4年	10年

凡例 英：英語，中：中国語，日：日本語

4名のインフォーマントは全員4年間滞日しており、日本語能力試験N1の資格をもっている。インフォーマントA以外の3人(B、C、D)は、中学から日本語を勉強しており、10年間の日本語学習歴をもっている。英語のレベルに関しては、インフォーマント全員が「母語」や「ネイティブ」と報告している。一方、中国語のレベルに関しては、インフォーマントAは「HSK(中国語検定)6級」と答えており、インフォーマントB、C、Dは全員「日常会話レベル」と答えている。

インフォーマントのペアの関係に関しては、データ1のインフォーマントAとBは大学に入学してから知り合い、同じ大学の同じ学部に入っている同級生で、日常的に頻繁に会って連絡し合う親しい関係をもつ友人ペアである。その一方で、データ2のインフォーマントCとDは高校時代から知り合い、同じ年に同じ奨学金で日本に渡った友人ペアである。インフォーマントCとDは来日1年目に同じ日本語学校に入っていたため、毎日会う親しい関係にあったが、2年目に異なる大学に入ってから以降会っておらず、今回のデータ収集の

ために3年ぶりに会った。

4.2. データの処理

収集したデータを文字化し、言語混用が見られた部分に注目した。人名(「光太郎」など)、地名(「神戸」など)、料理名(「寿司」など)はほとんどの場合訳語がなく、どの言語で発話されているかが判断しにくい場合が多いため、これらは基本的に言語混用の例として扱わない。しかし、以下(3)で見られるように、その発話の基盤言語の発音で産出されず、別の言語の発音で産出された場合や、以下(4)で見られるように、その発話の基盤言語において同じ意味をもつことばがあっても使用されず、別の言語のことばが選択された場合、それを言語混用の例として扱う。(3)では、「ホワイトデー(White Day)」という単語が発話された際、英語の発音 [waɪt deɪ] が使われず、日本語の発音 [houkaito de:] が使われている。(4)の場合、Dの発話の基盤言語は英語であるにもかかわらず、下線の箇所では英語で「食パン」を意味する「white bread」が使用されず、日本語の「食パン」が選択されている。

(3) B: ホワイトデー? He asked a lot of girls and the girls all tell him that.

<ホワイトデー? 他の女の子何人かに聞いたらあれがいいって。>

(4) D: Ya you know when I'm around, I make, I pretty much just make 食パン.

<そう、私がいるとき、だいたい食パンしか作らないの。>

4.3. 分析方法

2組の会話データの中で共通していたのは、①英語がベースになっていることと、②そのなかに日本語や中国語が混ざった部分があるということであった。しかし、今回のデータでは中国語が使用された例は3例しかなかった²⁾、本研究ではそれについて詳しく言及しない。日本語が使用された部分のみに注目し、インフォーマントごとに見られた日本語使用の例を、「語レベルの日本語使用」と「語を超えたレベルの日本語使用」の2つのタイプに分類して分析する。

「語レベルの日本語使用」とは、英語をベースとするひとつの発話のなかで、ひとつの個別の要素を日本語の語や名詞句で表現するタイプのものである。たとえば、(5)と(6)のように、ひとつの発話の中でひとつの単語が単独で日本語になっている場合、それを「語レベルの日本語使用」のグループに分類した。以下の下線部がその例である。(7)と(8)はひとつの単語より大きいまとまりであるが、意味上一単位になっているため、「語レベルの日本語使用」の名詞の用例として扱った。

(5) D: Ours is just, you enter this (.) ゼミ? With a teacher who research this particular thing?

<私たちの場合は、ただこの特定のことを研究する先生がいるゼミに入って?>

(6) C: まあ at least you got to see the- the- the architecture of Spain.

<まあ少なくともスペインの建築を見ることができたね。>

2) 本研究で観察された3例はすべて会話参加者以外の人の引用であり、そのうちの1例は後掲の(30)に示す通りである。

- (7) D: Ya my 心理学 (0.5) class

<そう、私の心理学の授業なんだけど>

C: Oh::

<ああ>

D: There was this .h ジェンダーの心理学

<その、ジェンダーの心理学があって>

- (8) D: Cos you know, we have a website

<あのさ、ウェブサイトがあって>

C: Mmhm, mm.

<うん、うん。>

D: So there's like, 教務課からのお知らせ

<でなんか、教務課からのお知らせがあって>

一方、日本語の部分がひとつの語より大きいまとまり（節、文など）になっている場合、あるいはひとつの語だけでひとつの発話が成立している場合、それを「語を超えたレベルの日本語使用」のグループに分類した。以下の下線部がその例である。

- (9) D: So like sometimes, when you're talking about grades [or whatnot in (0.3) in my 部活

<なんかときどき私の部活で成績とかなんかの話をしたら>

C:

[Mmhm

<うん。>

Mm::

<うん。>

D: Then they'll be like (1.0) oh: (0.8) what (1.2) 単位取れ-取れた?

<部活の人が、なんか、単位取れ- 取れた? とか聞くの。>

- (10) A: She didn't do anything on the trip, that's why, that's why she 大人になった.=

<彼女旅行で何もしてなかったから、だから、だから大人になった。>

=She had the 余裕 to enjoy it.

<楽しめる余裕があったから。>

B: That is true.

<本当にそうかも。>

A: She w- 一番余裕 (0.8) あったじゃん.

<彼女、一番余裕、あったじゃん。>

B: Mm.

<うん。>

- (11) D: Yeah I mean, I wanted one I got it so hh

<うん、まあ、それ欲しかったし、買ってもらったから...>

C: Mm hhhh

<うん。>

いいじゃんいいじゃん.

((2) を再掲)

「語レベルの日本語使用」は発話の中に単独で入る要素で、意味や機能も比較的に単純であると考えられる。それに対して、「語を超えたレベルの日本語使用」の場合、(9)と(10)は(主語を除いた)節、(11)は形容詞、終助詞的要素などを含む単独発話で、品詞や構造面では多様なものが含まれる(さらに下位分類が可能かもしれないが、本稿では分析をこのレベルにとどめる)。意味や機能が「語レベルの日本語使用」に比べて複雑であり、言語の形式だけでなく、使用場面や相手との相互作用への効果などの要素も「語を超えたレベルの日本語使用」に影響を及ぼすと考えられる。

以上の2タイプの違いはインフォーマントのそれぞれの使用頻度にも見られる。観察された日本語使用を上述した2つのタイプに分類し、2つのタイプの日本語使用の数をインフォーマントごとに表2にまとめた。

表2 日本語使用の数

	A	B	C	D	合計
語レベルの日本語使用	70	64	27	27	188
語を超えたレベルの日本語使用	212	133	7	1	353
合計	282	197	34	28	541

表2を見ると、話者によって2つのタイプの日本語使用の使用頻度が大きく異なることがわかる。データ1のペアのインフォーマントAとBの場合、語を超えたレベルの日本語使用は語レベルの日本語使用より使用頻度が高く、全体的に見ると日本語の使用頻度も非常に高い。インフォーマントBと比べると、インフォーマントAは特に語を超えたレベルの日本語をより積極的に使用していると見られる。一方、データ2のインフォーマントCとDはインフォーマントAとBと比べて日本語の使用頻度が低く、その中で特に語を超えたレベルの日本語使用があまり見られなかった。全体的に見ると、2ペアの違いは、語を超えたレベルの日本語使用の頻度に大きく現れていると言えよう。

以上の理由で、この2つのタイプの日本語使用は性質が違ふと考えられ、それぞれの性質を考慮した上で分けて分析する必要がある。「語レベルの日本語使用」の場合、形式はある程度明確に分類できると考えられる。一方、「語を超えたレベルの日本語使用」の場合、使用実態の全体像を見るためには形式に注目するより、実際どのような場面や状況において使用されたかに注目するほうが効果的であると考えられる。

次節の5節では、「語レベルの日本語使用」の用例を品詞ごとに分類し、データをあげながら形式上の特徴や用法などを詳しく分析していく。対する6節では、「語を超えたレベルの日本語使用」に該当する用例を対象に、それが話者間の相互作用の中でどのように使われ、どのような機能を果たしているかを、社会言語学的観点及び会話分析のアプローチを用いて分析する。

5. 語レベルの日本語使用

5.1. 品詞分類

語レベルの日本語使用は合計 188 例がある。各インフォーマントの日本語使用を品詞ごとに分類し、まとめたものを表 3 に示す。

品詞分類は陳（2016）を参考にした上で作ったが、動名詞（verbal noun）が動詞として使われた例がいくつか見られたため、それらの例を区別するために「動名詞」の分類を追加した。また、品詞の分類がしづらい例もいくつかあったため、「その他」の分類も設けた。表 3 以降で各品詞の例をあげ、説明する。

表 3 語レベルの日本語使用の品詞分類

品詞	A	B	C	D	合計	割合
名詞	32	30	15	24	101	53.7%
感動詞	5	6	10	0	21	11.2%
動名詞	6	9	0	1	16	8.5%
動詞	8	5	0	1	14	7.4%
副詞	9	4	1	0	14	7.4%
イ形容詞	3	1	1	1	6	3.2%
ナ形容詞	2	3	0	0	5	2.7%
助詞	0	3	0	0	3	1.6%
その他	5	3	0	0	8	4.3%
合計	70	64	27	27	188	100%

名詞は語レベルの日本語使用の最も大きな割合を占めており、Poplack（1980）や Nishimura（1995）などの先行研究の結果と一致している。用例は以下の通りである。

(12) B: We didn't go on the 高速.

<高速に乗らなかったよ。>

(13) D: Actually I haven't been to the 卒業式 in a while.

<実はけっこう長い間卒業式に行っていないんだ。>

(14) D: Ours is just, you enter this (.) ゼミ?

<私たちの場合は、ただゼミに入って>

((5) の一部を再掲)

(15) C: Um (.) it was a workshop for (0.2) 就活?

<なんか、就活のワークショップだったけど>

以上の例では、「高速」と「卒業式」のように、英語にも同じ意味をもつことばがあるにもかかわらず日本語で発話された例もあれば、「ゼミ」や「就活」など、日本特有の概念や習慣について言及することばも多く現れる。前者のほうは、6.1.1 節で詳しく分析する。後者については、英語には同じニュアンスのことばがない場合、語彙上のギャップを埋めるために日本語の単語がそのまま使用されると考えられる。相手は自分と同じ生活背景と日

本語能力をもつ場合、無理に訳したり説明したりするより、直接日本語のことばを混用したほうが効率的であると説明できる。

次に多く見られたのは感動詞である。本研究のデータの中で見られた日本語の感動詞の使用は2つのパターンがあり、「語レベルの日本語使用」に分類できる文の一部として感動詞が使用された場合と、「語を超えたレベルの日本語使用」に分類できる感動詞だけでひとつの発話になる場合がある。ここでは文の一部として使用された感動詞のみを分析対象とし、感動詞だけで独立した発話の用例は6節で分析する。使用された感動詞は(16)で使われた「まあ」(11例)、「まあまあ」(3例)、「うん」(3例)、「そう」(1例)、「え」(1例)、「いや」(1例)、「おめでとう」(1例)である。

(16) D: I'm so antisocial h

<私、すごい非社交的な人なんだよね>

C: Uhh:: まあ h it takes energy.

<んー、まあ、気力があるもん。>

動詞として使われた動名詞はその次に多く見られ、以下はその用例である。動名詞がそのまま動詞として使われた例は13例あり、(18)のように英語の屈折接辞が動名詞につけられる例も3例ある。日本語の動名詞や動詞に英語の屈折接辞がつく現象については5.2節で詳しく分析する。

(17) A: But I guess recently you 化粧 every morning.

<でも最近毎朝化粧するか。>

(18) B: You 二度寝 ed though.

[+屈折]

<でも二度寝したじゃん。>

((1)の一部を再掲)

動詞の使用は14例見られ、そのうちの2例は日本語の動詞の辞書形に英語の屈折接辞がつけられたケースである(5.2節を参照)。

(19) B: He say he 目覚めた to driving.

<彼が運転に目覚めたって。>

(20) A: This is (.) gonna be your first time くつろぐ ing in your (0.6) house.

<これが初めて自分の家でくつろげる機会じゃん?>

[+屈折]

副詞の使用は14例見られ、以下はその用例である。

(21) C: You わざわざ went there

<わざわざそこに行ったのに>

形容詞はイ形容詞とナ形容詞を合わせて11例があり、その用例は以下の通りである。

(22) D: I was like oh, how 優しい

<あ、めっちゃ優しいなーと思った。>

【イ形容詞】

(23) B: I was so 元気 this morning.

<今朝めっちゃ元気だったよ。>

【ナ形容詞】

助詞の日本語使用の出現率は最も低く、(24)で見られる「とか」のほか、「なんか」の使用も2回見られた。Nishimura (1995)で見られた「よ」や「ね」などの終助詞の単独の混用は見られなかった。

- (24) A: We didn't even take like a proper group photo, we cannot post any- I d- we don't have

anything to post though.

<ちゃんと全員が写ってる写真撮らなかったじゃん、何も投稿できない-私が- 私たちが投稿できる写真がないけど。>

- B: The Universal Globe I guess

<ユニバーサル・グローブとか>

- A: Like, ya, that was-

<なんか、そう、それが->

- B: I don't know, とか. I'll post the Times Square one.

<ふーん、とか。タイムズ・スクエアの写真を投稿するわ。>

「その他」の分類には (25) で見られる「ってか」(6 例) のほか、「ハクション」(1 例) と「じーっ」(1 例) といったオノマトペが含まれる。

- (25) A: ってか I'm like the biggest 聞き相手 though, like Kotaro, stories.

<ってか私が一番の聞き相手だと思うけど、光太郎の話なら。>

- B: Mm! I only tell you.

<うん！A にしか話さないし。>

次の 5.2 節では、上記のうち日本語の動名詞や動詞に英語の屈折接辞がつく現象を取り上げ、詳しく分析を行う。

5.2. 日本語の動詞・動名詞における英語の屈折接辞の接続

集めたデータのうち、日本語の動名詞や動詞に英語の屈折接辞がついた例は 5 例あった。すべて、A と B にのみ見られたものである。その中で、動詞を動名詞 (gerund) や現在分詞の形にする -ing が 3 例 ((26) ~ (28) を参照)、過去時制を表す -ed が 1 例 ((29) を参照)、現在形三人称単数の -s が 1 例 ((30) を参照) あった。以降、英語の屈折接辞がついた日本語の動名詞や動詞の発音に関しては、国際音声記号 (IPA) を使って [] 内に示すこととする。

- (26) A: This is (.) gonna be your first time くつろぐ ing [kuɾsuroguɪŋ] in your (0.6) house.

<これが初めて自分の家でくつろげる機会じゃん？> ((20) を再掲)

- (27) A: Then I was like, Jia will be angry at me for ドタキャン ing [dotak'ɒɪŋ].

<で、ドタキャンしたらジア (B の仮名) に怒られるって思った。>

- (28) B: Then he started 解説 ing [kaiɕetsuɪŋ] his-

<で彼が自分の (...) を解説し始めて>

He was like 初球ボール, アウ-アウトロー then he was like こっちねこっち

<初球ボール、アウトローって言って、こっちねこっちみたいな感じで言って>

- (29) B: You 二度寝 ed [ɲidone:d] though.

<でも二度寝したじゃん。>

((18) を再掲)

- (30) A: But I have like a button that turns on the お湯。

<でもお湯をつけるボタンがあるの。>

B: Mm mm.

<うんうん。>

A: Eh? No no as in like, 沸かす s [ujakasus] the-

<え？違う違う、(...)を沸かす->

この現象は Poplack (1980) が提唱した自由形態素制約 (free morpheme constraint) に違反する例である。自由形態素制約とは形態素に基づいた制約で、コードスイッチングは自由形態素 (free morphemes) と拘束形態素 (bound morphemes) の間では起こることがないとされている (Poplack 1980)。ここであげた -ed や -ing などの英語の屈折接辞は、単独で語を構成せず他の形態素に付属しなければならない拘束形態素であるため、(26)～(30) で見られた混用の現象は自由形態素制約で説明できない。日本語の動詞や動名詞に英語の屈折接辞がつく例は、Nishimura (1995) や Azuma (1997) などの日英コードスイッチングの研究にも見られなかった。しかし、シンガポールでは、北京語や閩南語などの動詞に英語の屈折接辞がつく現象は珍しくない。Tay (1989) は、閩南語で「寝る」を意味する kun (睏) に英語の -ing がつけられる kuning という単語の例を自由形態素制約の反例としてあげた。Norizam (2014) によるシングリッシュとマングリッシュ (Manglish; マレーシア英語) の語彙調査では、マレー語や広東語などの現地語の語彙に -ing がつけられた例もいくつか見られた。本研究のインフォーマントはおそらくこの混用形式に慣れており、英語がベースになっている談話の中に日本語の語彙を組み込むストラテジーとして、日本語の動詞と動名詞に英語の屈折接辞をつけたと考えられる。

6. 語を超えたレベルの日本語使用

語を超えたレベルの日本語使用は合計 353 例が見られた。4.3 節で述べた通り、語を超えたレベルの日本語使用は主にインフォーマント A と B によって産出され、インフォーマント C と D の会話の中ではあまり見られなかった。そのため、ここでは A と B の発話を主な分析対象とする。

語を超えたレベルの日本語使用の実態をより詳しく見るために、2 つのレベルで分析を行う。ひとつは話し手が単独で自身の発話を計画するなかで使用する言語を選択するもの、そしてもうひとつは、話し手が、相手の発話に応じて使用する言語を選択するものである。まずは 6.1 節で前者の話し手のみの発話行動に注目し、発話レベルで分析を行う。その次に、6.2 節で話し手だけではなく、聞き手の発話も含めた会話参加者 2 人の相互作用に注目し、会話レベルで分析を行う。

6.1. 発話レベルの分析

本節では、話し手が単独で自身の発話を計画するなかで使用する言語を選択するものについて分析を行う。本稿のデータのなかで、このような言語混用は日本と関連性が高い話題について話す際 (6.1.1 節) と、話し手が他者の発話を引用する際 (6.1.2 節) に観察された。以下、順に述べる。

6.1.1. 話題に応じた言語混用

データの中では、日本と関連した話題、あるいは日本に来てから接触した話題について話す際、日本語が頻繁に使用されていた。この混用パターンでは、会話の中に日本語が散りばめられており、使用された日本語は語を超えたレベルに限らず、語レベルでも観察された。この語レベルの日本語使用は談話の話題に支配されると考えられるため、ここでは5節で扱った語レベルの日本語使用も分析の範囲に入れた上で、分析を行う。以下はその用例である。

(31) A: ((咳する)) I don't know why I'm coughing

<なんで咳してるかわからない>

B: hh It's dry.

<乾燥してるから。>

(0.8)

A: Yeah:

<そうだね>

(0.8)

A: .h (0.3) 東京やばいね.

(0.7)

B: 花粉? 花粉症?

A: 花粉症だと思う.

B: マジで?

(31) では、A は自分がなぜ咳をしているかがわからないと言ったあとに「東京やばいね」と言って、東京の環境のせいで咳が出るという推測をする。そこから B は花粉症という話題を提示し、A と B は花粉症について話す際に日本語を混用し始める。シンガポールは四季のない熱帯地域であるため、一般のシンガポール人にとって「花粉症」というのは馴染みのない概念であり、シンガポール人留学生は日本に来てから「花粉症」を自分の周りで聞いて経験する場合が多い。そのため、「花粉」や「花粉症」などの語彙は日本語で産出されやすく、その日本語の単語が頻繁に混用される会話が続くと、大きいまとまりの日本語も混用しやすい環境が作られると考えられる。

(32) A: Did he drive at the: あの一番 (.) [左側?

<一番左側で運転してた?>

B: [We didn't go on the 高速.

<高速に乗らなかったよ。>

(0.8)

A: あっ、よかったね。

B: うん.

B: .h We (.) could have gone on the 高速 but we avoided [it like the plague=

<高速に乗っても良かったけどずっと避けてた>

- A: [ビビった.]
- B: =We were like, green, 看板 [hhhhhh
<緑の看板だ！みたいな>
- A: [hhhhhh=
- A: =hhh Green 看[板
<緑の看板>
- B: [I was like oh, 高速高速! [then he will あ, やばいやばい then he
will
change l- hurry up and change lane, we swerve into the other lane hhhhhh
<私が、あっ高速高速！って言ったら彼があ、やばいやばいって言って、急い
で車線変更して、急に違う車線にそれで>
- A: [hhhh ahahahahahahha hhhhhhhhh=
- A: =Did he 合図? h
<合図したの?>
- B: .h Ah I think ya he [did h
<あ、うん多分したと思う>
- A: [¥あ, [よかった¥
- B: [He:: めっちゃかく- 巻き込み確認する [hhhhh=
<彼、めっちゃ巻き込み確認する>
- A: [hhhhh
- B: =目視! [hhhhhhh
- A: [¥目視目視¥ hhhhhhh=
- A: =¥巻き込み確認! ¥

(32) では、A と B は B の彼氏の運転について話している。この会話で、運転に関連する用語はほとんど日本語で産出されている。この傾向が見られたのは、A と B は日本でともに合宿免許を取り、運転も日本ではじめて習ったことから、運転と関連する語彙は日本語で学習し、吸収したためであると考えられる。その上、A と B は一緒に合宿に参加したため、会話の後半でその共通の経験について話す際、その環境で使用された言語が使用されやすくなったと考えられる。

ここであげた例から、会話参加者は日本と関連している話題や、日本語で学習した、あるいは経験したことなどについて話す際に、日本語が使用されやすいと見られる。しかし、談話の基盤言語は完全には日本語にならず、会話参加者は英語と日本語を両方とも談話に織り交ぜながら話している。そのため、こういった話題で完全に言語が切り替わるというよりは、特定の話題で日本語の言語リソースが活性化され、言語を混用するモードになる傾向があると考えられる。

6.1.2. 引用

データの中で、前に自分やほかの人が言った内容を直接的に、あるいは間接的に引用す

るとき、日本語を混用する例が多く見られた。これは先行研究においてもよく見られた混用のパターンであり (Nishimura 1995; Tay 1989)、本研究でも語を超えたレベルにおいて最も顕著に表れた混用パターンである。以下の用例では、引用の部分を下線で示す。

(33) A: I [told you that, I said that=

<私それ言ったじゃん、言った>

B: [As in, highball-

<だからハイボールは>

=Highball and cocktail very different what, the taste, cock[tail very sweet.=

<ハイボールとカクテル全然違うじゃん、味は、カクテルめっちゃ甘い。>

A:

[No

<それじゃなくて>

=I [said, I said, ハイボール飲みたい then you were like, 酒鬼.

<私が「ハイボール飲みたい」って言ったら B が「飲んべえ」って。>

B: [Uh huh, uh huh uh huh

<うん、うんうん>

(0.7)

B: I never say!

<私それ言っていないよ！>

(0.6)

B: Sam say.

<サムが言ったよ。>

A: Who w- ya then I was like, じーっ, then I was like (0.6) how dare you h

<誰が-うんで私がじーっを見て、それで「よくもそんなこと言えるね！」って>

B: h huh h

(0.6)

A: And then now you're like ハイボ-ハイボール[めっちゃうまい

<なのに今私に「ハイボールうまい」って言ってるの？>

B:

[うまかった::

(33) では、過去の出来事について話したとき、ひとつの会話において日本語、中国語 (イタリック体の部分)、英語の複数の言語で引用が行われている。ここでは発話された言語を保ったまま実際の発話を引用することもあれば、A の最後の発話のように、もともと B が英語で発話した部分を日本語で引用することもある。Gumperz (1982) によると、この傾向から言えるのは、引用の部分で言語混用を行う目的は、元の発話言語を伝えることではなく、会話の基盤言語と異なる言語を使うことによって引用の部分を引き立て、会話にメリハリをつけるというスタイル的な効果をもたらすためである。これは特に過去の出来事を物語として語るときによく使われるストラテジーである。以下 (34) で、B が自分の彼氏がホームランを打ったあとに家に帰ってからそのホームランを打ったときの状況を再現しながら解説していたことを A に話しているが、引用部分で日本語を混用すること

でその状況の面白さをより効果的に伝えることができると見られる。

(34) B: It was like eight in the morning he was like これ見て、初球ねこれね [hehehe ha ha

<朝 8 時だったのに彼がこれ見て、初球ねこれねって>

A: [h ha ha ha ha

B: .h [Then he started 解説 ing his-

<で解説し始めたの、彼の->

A: [hhhh

B: He was like 初球ボール (0.5)アウ-アウトローアウトロ then he was like こっ
ちねこっち

<彼が初球ボール、アウトロアウトロって、でこっちねこっちって>

A: [hhh

B: [hhh Then he would be like (0.2) こんな構えして [hhh

<でこんな構えして、とか言ってて>

A: [hhh

B: After that he was like (0.9) and he kept explaining, like [at what angle he tilted the bat and eh=

<その後彼が、彼がずっと説明してたの、バットをどの角度で傾けたかとか>

A: [Uh huh h huh huh huh hhh

B: How he ためた the bat eh heh ah:=

<バットをどうためたか>

本研究で収集したデータのなかの引用の例には、引用部分の前に「主格の人称代名詞 (I/you/he/she/they など) + be (現在形 is/are ・ その短縮形 's/'re ・ 過去形 was/were など) + like」の構文が非常に多く見られた。これは引用を導入するマーカーとして使用されており、実際発話されたことばだけではなく、思ったことや出来事の状況などの言語化されていないものまで表すことができる (Romain and Lange 1991)。たとえば、(33) では、この like 構文は 4 回使用されたが、その後ろに話し手以外の人の実際の発話が引用されたのは「then you were like, 酒鬼」、「And then now you're like ハイボ-ハイボールめっちゃうまい」の 2 回である。しかし、「ya then I was like, じーっ」の場合、like の後ろにきたのはおそらく実際の発話ではなく、相手のことばを聞いたあとに相手を睨んでいた状況を表す擬態語である。そのあとに「then I was like (0.6) how dare you」が発話されたが、ここの「how dare you」は話し手の実際の発話なのか、ただ頭の中で思っていたことなのか、曖昧である。Romain and Lange (1991) によると、この like 構文の使用は直接引用と間接引用の区別をぼかすと同時に、発話と思考の区別をぼかす効果もあるという。この like 構文を使うことによって、話し手の引用できる要素は実際の発話に限らず、思考や表情、動作など多様な題材から伝えたいことを選択し、相手に伝達する自由を得る。なお、この伝達の自由は引用する題材に限らず、何語でそれを伝達するかにも当てはまると考えられる。そのため、

この like 構文は引用を導入する機能があると同時に、会話の基盤言語以外の言語も含めたすべての言語的リソースを活性化させる機能もあり、言語混用をする機会を作る構造パターンのひとつであるとも言えよう。

6.2. 会話レベルの分析

本節では、話し手が、相手の発話に応じて使用する言語を選択するものについて分析を行う。会話レベルで行われる日本語の混用には、会話の相手の発話内容を評価するもの（6.2.1 節）、相手の発話にツッコミを入れるもの（6.2.2 節）、相手の発話にあいづちを打つあるいは応答するもの（6.2.3 節）、相手の発話を修正、限定するもの（6.2.4 節）の 4 つのタイプが観察された。以下、順に述べる。

6.2.1. 評価

Goodwin and Goodwin (1992) によると、評価 (assessments) というのは、会話において言及された人物や出来事に対する評価や判断である。評価は「参加の産出物」として発話されており (Pomerantz 1984, p. 57)、会話の参加者が会話の内容に対して自分の感情を示し、相手に対する共感を示す効果がある。

集めたデータでは、話し手が発話した内容に対して聞き手が評価を行う状況において言語混用が行われるケースが多々見られた。以下の用例では、評価の部分を下線で示している。

(35) B: And he pointed and [showed me, he was like, at this angle I tilted-

<で彼が指差して私に見せたもん、この角度で傾けた、みたいな感じで>

A: [uh huh huh huh (0.5) うんこの角[度ね:

B: [この角度で h=

A: やばい.=

B: =And then he was like, time stopped when I hit the ball [h ha ha ha ha

<ボール打ったとき時間が止まったとか言って>

A: [a ha ha ha ha ha ha hh 頭悪っ.

(35) は (34) であげた会話の抜粋の続きで、B の彼氏がホームランを打ったあとに家で B にその打席の解説をしていた状況を B が A に話している。その話を聞いていた A は会話中に 2 つの評価を行った。1 つ目の評価は、B の彼氏がどの角度でバットを傾けたかまで解説したことに対して「やばい」と評価している。そのあと B が彼氏の「ボール打ったとき時間が止まった」という発話を引用したが、A がその発話に対して「頭悪っ」と 2 つ目の評価をした。

(36) D: Yeah I mean, I wanted one I got it so hh

<うん、まあ、それ欲しかったし、買ってもらったから...>

C: Mm hhhh

<うん。>

いいじゃんいいじゃん.

((2) を再掲)

(36) では、スタンドミキサーを買ってもらったことについて D が C に話しており、C はそれに対して「いいじゃんいいじゃん」と評価し、欲しかったスタンドミキサーを買ってもらった D の嬉しさに共感を示している。

ここであげた例文において、評価の部分は全て日本語で発話されている。評価という言葉行動は、日本語の会話において重要な役割を果たしていると考えられる。Strauss and Kawanishi (1996) によると、英語や韓国語の会話に比べると、日本語の会話では評価の頻度が高く、相手への共感や相互理解を示す手段として評価が使われているという。本研究のインフォーマントは、日本で日本語話者との交流を通してこの会話のストラテジーを身につけた可能性があり、シンガポール人留学生同士で話すときにもこのストラテジーを取り入れていると考えられる。

6.2.2. ツッコミ

ツッコミは日本のユーモアの基礎概念のひとつであり、小矢野 (2004) は、ツッコミについて、話し相手のボケの発話、つまり会話の流れの中で、正常な談話の軌道から逸脱した発話に対して、理不尽、不合理、非常識であることを指摘する発話であると定義している。本研究のデータにおいても、会話参加者が相手の言ったことに対して日本語でつつこむ例が見られた。以下の用例では、ツッコミに該当する部分を下線で示している。

(37) A: I couldn't study eh, last night.

<昨日の夜勉強できなかったよ。>

(0.7)

B: I, o- obviously didn't study last night.=

<明らかに、私も昨日の夜勉強しなかった。>

A: =I know.

<知ってる。>

(1.4)

A: You had to watch him re-enact baseball.

<彼氏が野球を再現してるのを見なきゃいけなかったでしょう。>

B: I had to watch him, re-enact that one 打席.

<彼があの一打の打席を再現してるのを見なきゃいけなかった。>

A: やばいね頭 (0.4) ボケ h

B: hhh ¥なんやねん¥

(37) では、B の彼氏が野球を再現していたせいで、B が勉強できなかったことについての会話である。A は「野球を再現してるのを見なきゃいけなかったでしょう」と言ったあと、B は A の発話に対して「野球ではなく、あの（ホームランの）ひとつの打席」と限定をした。A はそれに対して否定的な評価を行ったが、B がそこで笑いながら「なんやねん」とつつこんだ。

ボケとツッコミはもともと漫才の笑いを構築するパターンであるが、親しい対等の関係をもつ会話参加者同士の間で行われるカジュアルな日常会話においても現れる（小矢野

2004)。このユーモアの概念は日本独特なものであり、日本のお笑い番組などでは普遍的である。さらに、このユーモアのスタイルは大阪的談話の特徴であり（小矢野 2004）、大阪方言と強く結びつけられている。A と B は普通日本語を使用するとき、東京方言を使用するが、ここであげた 2 例においては、B はツッコミをする際に大阪方言形式の「やねん」を使用している。小矢野（2004）は、ボケとツッコミによって、会話参加者の間に健康な笑いが生じ、会話参加者の間の友好的な人間関係が維持され、強化されると主張した。以上の例から、A と B の間で笑いを作るために、日本のユーモアのストラテジーであるツッコミが、日本語を用いて効果的に行われているが見られる。

6.2.3. あいづち・応答

集めたデータのうち、日本語のあいづちや応答の使用が多く見られた。以下の用例では、あいづちと応答の部分を下線で示している。

(38) B: But you were late.

<でも遅れて来たじゃん。>

(0.8)

A: And then I 二度寝した.

<その後二度寝した。>

B: Ah::=

<あー>

A: =That's why.

<だから遅刻したの。>

B: なるほどね

(39) B: Then cos he was saying like, all your Stories only got three people hhh

<私のインスタグラムストーリー全部 3 人しか写ってないって彼が言ってて>

A: Oh, don't have Michelle?

<あ、ミシェルがいないってこと？>

B: Ya ya, cos like Mich (0.3) either she (0.6) like, 別行動?

<うんうん、だって、ミッシュはなんか、別行動してるか>

A: そうそうそう

B: Or she don't want come into my Story.

<か、私のストーリーに写りたくないか>

ここでは、相手の話した内容に対して理解を示す場面((38))や、同意を表す場面((39))などで、あいづちや応答となる日本語の感動詞が使用されている。感動詞の部分が異なる言語で発話される現象は Gumperz (1982) においても見られた。Nishimura (1995) は「日本語の象徴的な使用機能」をあげ、英語の会話において日本語のことばを使うことによって、日系カナダ人二世のアイデンティティーを象徴する機能があると主張した。ここで見られた日本語使用もそのような機能を果たす可能性があり、あいづちや応答などの要素を英語ベースの会話に混ぜることによって、インフォーマントの「日本語を話せる多言語話

者」としてのアイデンティティーを示していると考えられる。

また、ここであげた例でも見られるように、あいづちや応答が発話された前の発話において日本語の単語が使用されると、その発話の返答となるあいづちや応答はさらに日本語になりやすいと考えられる。たとえば、(39) では、B は発話において「別行動」という日本語の単語を使用した直後に、A はその発話に対して「そうそうそう」という日本語のあいづちを使った。これは一種のスピーチ・アコモデーションとしても見ることができると考えられる。

6.2.4. 修正・限定

話し手が前に英語で発話した内容について補足説明や限定をしようとする際に、日本語でその部分を産出する例が見られた。これは、話し手が英語で産出した発話の意味が曖昧で、聞き手に誤解された、あるいは誤解されそうであると話し手が判断した場合に、その発話を日本語で再産出し、その意味を明確に伝えようとする行動であると考えられる。以下の用例において、曖昧だと捉えられる英語の発話を下線で示し、日本語で再産出され、修正・限定が入った発話を二重下線で示している。

(40) A: やだなー, I didn't bring my umbrella.

<やだなー、傘持ってきてなかった。>

B: I can give you an umbrella, like give you an umbrella.

<傘あげるよ、あげる。>

A: 優しい.

B: Like マジであげる.

<いや、マジであげる。>

(40) では、B の「I can give you an umbrella」は「傘を貸してあげる」と「傘をあげる」という 2 つの意味解釈があるが、一般的に「傘を持ってきてなかった」と言ったら「傘を貸してあげる」のほうの解釈で捉えられるほうが多いと考えられる。しかしここで B は家に傘がたくさんあって A がほしければ一本あげるという意味で言ったので、日本語で自分の前の発話を再産出し、さらに「あげる」という動詞に「マジで」をつけて、本気で A に傘を一本あげるということを明確に伝えようとしている。

(41) B: Like he and two other people meeting to discuss their uniform.

<だから彼がもう 2 人と会ってユニフォームについて話し合うらしい。>

A: They have uniform?

<ユニフォームあるの?>

B: ジャ-ジャ-ジャー, ユニフォーム?

A: ほう.

(41) では、B の彼氏がその日の夜に職場の野球チームのほかのメンバーと会って、野球のユニフォームについて話し合いをすると A に話した。しかし、英語で「uniform」は「制服」の意味もあるので、A が「They have uniform?」という疑問に対して、B は日本語で「ジャ-ジャー, ユニフォーム」とその発話に補足した上で発話を再産出し、制服ではなくスポ

ーツのユニフォームのことを言っていると明確に伝えている。

ここであげた日本語使用の例は Gumperz (1982) であげられた繰り返し (reiteration) の機能と一致していると考えられる。Gumperz (1982) は繰り返しの機能について、前に言ったことを明確化する機能を果たす場合もあるが、一般的に繰り返しは発話内容を詳説したり強調したりするためのものであると述べている。ここであげた例の場合、英語で言ったことをただ日本語に変えて繰り返すだけではなく、修正を入れた上で再産出されていると見られるので、英語で言ったことを明確化するという機能によって日本語の発話が産出されていると考えられる。

7. 考察

本研究は、日本に在住するシンガポール人留学生の談話データの分析を通して、以下の2つのリサーチクエスチョンを追求した。

- (a) 日本の大学に進学し、長期間日本で生活しているシンガポール人留学生同士が話す際の多言語混用の実態はどのようなものか
- (b) シンガポール人留学生同士の多言語混用はこれまでほかの多言語コミュニティーで見られた多言語混用とどのように異なるか

まず、(a) であげた、本研究におけるシンガポール人留学生の多言語混用の実態について述べる。本研究のデータでは、シンガポール人留学生の会話は基本的に英語がベースになっており、日本語や中国語が混用されると見られる。そのなかで、中国語の使用は稀であり、日本語の混用が最も顕著であった。また、言語混用のパターンは非常に多様であり、個人差も見られた。A と B に比べて、C と D の日本語使用はほとんど語レベルに限られている。C と D は主に日本語の名詞を混用しており、C は日本語の感動詞も多く使用している。

一方、A と B の場合、語レベルで見られた日本語使用は C と D と同じく、日本語の名詞の使用が多数を占めているが、ほかの品詞カテゴリーの要素の混用も見られた。特に、日本語の動詞や動名詞に英語の屈折接辞をつける現象が観察された。また、A と B の言語混用は語レベルだけでなく、語を超えたレベルでも日本語を頻繁に混用していた。語を超えたレベルの言語混用は多様なパターンがあり、本稿では話題に応じた言語混用、引用、評価、ツッコミ、あいづち・応答、修正・限定に分類した。

C と D の会話においては、日本語の使用が限られており、主に日本語の名詞が混用されていることから、語彙上のギャップを埋めるために日本語が使われていると考えられた (5.1 節)。それに対して、A と B の言語混用は非常に自由で、縛りもなく自分の会話の中で2言語を織り交ぜている。2ペアにこのような差が現れたのはおそらく話者間の親疎関係と関係していると考えられる。インフォーマント A と B は非常に親しい関係をもち、頻繁に会って話す中で、自分たちの会話に面白みや彩りを加えるために自由に複数の言語を混用すると考えられる。それに対して、インフォーマント C と D は久しぶりに会った友人同士で、お互いの近況もあまり知らない状況で会話しているため、必要でない、大きいまとまりの日本語の混用を控えている可能性がある。

次に、(b) に注目し、シンガポール人留学生同士の多言語混用の実態についてほかのコミュニティにおける多言語混用との比較を通し、その特徴をあげることとしたい。まず、4 人のインフォーマントに共通していた名詞の混用は、アメリカの英語とスペイン語のバイリンガル (Poplack 1980) や二世の日系カナダ人 (Nishimura 1995) などの先行研究においても見られ、最も普遍的な言語混用パターンであると考えられる。一方、A と B の間で観察された、英語の屈折接辞を日本語につける現象に関しては、Tay (1989) のシンガポール人のデータにも英語の屈折接辞が福建語の動詞につけられたという似たような現象が見られた。このような現象はほかのコミュニティではあまり見られないものであるが、シンガポールでは頻繁に観察される。このような言語混用に慣れている A と B は第二言語である日本語を混用する際にも同様の形式を適用したと考えられる。

また、引用、あいづち・応答、修正・限定の機能を果たす語を超えたレベルの言語混用は Gumperz (1982) であげられ、二世の日系カナダ人 (Nishimura 1995) とシンガポール人 (Tay 1989) のデータにおいても見られた。しかし、評価やツッコミは今までの先行研究ではあまり見られなかった。これは、日本語のコミュニケーション・スタイルの特徴が現れる言語混用のパターンであり、長期に渡って日本人と接触することを通して身についた習慣であると考えられる。

A と B は多様な機能をもつ日本語を効果的に自分の会話に織り交ぜており、シングリッシュや英語など自分の母語を使用しながら、英語の屈折接辞をほかの言語のことばにつけるなどの習慣を日本語にも適用した上で、日本人とのコミュニケーションでよく使用する評価やツッコミなどのコミュニケーション・ストラテジーも日本語で行い、自分たちの会話に組み込んで使っている。A と B の多言語混用から、日本の文化的知識が身につけており、日本社会に染まっていることがうかがえ、シンガポールと日本の二重の文化的アイデンティティが現れていると考えられる。一方、C と D の場合、2 人は日本に生活基盤を持っているため、学校生活や日常生活について話すときやむを得ず日本語の単語を使用したほうが伝えやすいことが多く、そういった必要ときにのみ日本語を使用していると見られる。同じコミュニティの話者の言語混用パターンは話し相手との親疎関係や、言語混用の個人的な習慣と許容度などの要素で、本研究で見られたように大きく差が出る。C と D は比較的多くのケースで観察される、語彙上のギャップを埋める形で言語混用を行っている一方、A と B の多言語混用は非常に自由度が高い。2 ペアの言語混用の使用実態は両極端にあると考えられ、日本のシンガポール人留学生の多言語混用のあり方は一通りだけではなく、多様であることが見られる。

8. まとめと今後の課題

以上、シンガポール人留学生の会話における言語混用の実態を分析した。さまざまな形や機能で言語混用が行われたが、本研究では主に日本語の混用に注目し、語レベルと語を超えたレベルの日本語使用に分類した上で分析を行った。その結果、本研究のインフォーマントの 2 ペアの間で、言語混用のパターンにおいて差が大きく現れた。1 ペアは比較的保守的な言語混用を行った一方、もう 1 ペアは英語の屈折接辞を日本語の単語につけ、日

本語で話し相手が言ったことに対して評価し、ツッコミをするという、先行研究ではあまり指摘されてこなかった言語混用を行う様子が見られた。

このような差が出たのは話し相手との親疎関係や、言語混用に対する個人差、話し相手に合わせるためのアコモデーションなどの要素が関係すると考えられる。そのため、今後の課題として、どのような要素がどのように言語混用に影響するかを検証するために、ほかのペアのデータを取り、ペアの組み合わせを変えてデータを取るなど、データを増やした上で比較を行いたい。また、本稿では理論的な分析ができなかったため、今後は理論的な枠組みを分析に取り入れた上で、日本のシンガポール人留学生の言語混用を理論的な観点から考察したい。特に、本稿で見られた A と B のような言語混用のパターンは、Li (2011, 2016) などであげられた「トランスランゲージング」の現象に近いと思われる。今後はこの観点と分析枠を用いて分析を行うとともに、A と B に見られる言語混用とトランスランゲージングの異同を明らかにして、新たな理論の構築をめざしたい。

【参考文献】

- 小矢野哲夫 (2004) 「大阪的談話の特徴—ボケとツッコミ—」『日本語学』23(11), pp.42-52.
- 陳佳慧 (2016) 「二言語使用者としての留学生のコード・スイッチングについて—日本在住の中国語母語話者の場合—」大阪大学大学院日本語学専門分野修士論文.
- 藤村香予 (2013) 「二言語話者の談話における「コードスイッチング」・「コードミキシング」の必要性—英国に住む日本人の場合—」『安田女子大学紀要』41, 23-32.
- Azuma, S. (1997). Lexical categories and code-switching: A study of Japanese/English code-switching in Japan. *The Journal of the Association of Teachers of Japanese*, 31(2), 1-24.
- Bao, Z. (2015). *The Making of Vernacular Singapore English: System, Transfer, and Filter*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goodwin, C., and M. H. Goodwin. (1992). Assessments and the construction of context. In Duranti, A. and C. Goodwin (Eds.) *Rethinking Context* (pp. 147-189). Cambridge: Cambridge University Press.
- Gumperz, J. (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huang, X., and C. Zhang. (2018). A corpus-based analysis on code-mixing features in Mandarin-English bilingual children in Singapore. *International Journal of Cognitive and Language Sciences*, 12(4), 540-544.
- Ikeda, K., and D. Bysouth. (2013). Japanese and English as lingua francas: Language choices for international students in contemporary Japan. In Haberland, H., D. Lønsmann, and B. Preisler (Eds.) *Language Alternation, Language Choice and Language Encounter in International Tertiary Education* (pp. 31-52). Multilingual Education, Vol. 5. Dordrecht: Springer.
- Kamwangamalu, N., and C. L. Lee. (1991). Chinese-English code-mixing: A case of matrix language assignment. *World Englishes*, 10(3), 247-261.
- Lee, C. L. (2003). Motivations of code-switching in multilingual Singapore. *Journal of Chinese Linguistics*, 31(1), 145-176.

- Li, W. (2011). Moment Analysis and translanguaging space: Discursive construction of identities by multilingual Chinese youth in Britain. *Journal of Pragmatics*, 43(5), 1222-1235.
- Li, W. (2016). New Chinglish and the Post-Multilingualism challenge: Translanguaging ELF in China. *Journal of English as a Lingua Franca*, 5(1), 1-25.
- Ng, B. C., and F. Cavallaro. (2019). Multilingualism in Southeast Asia: The post-colonial language stories of Hong Kong, Malaysia and Singapore. In Montanarim S. and S. Quay (Eds.) *Multidisciplinary Perspectives on Multilingualism* (pp. 27-50). Boston: De Gruyter Mouton.
- Nishimura, M. (1995). A functional analysis of Japanese/English code-switching. *Journal of Pragmatics*, 23, 157-181.
- Norizam, N. (2014). *A Comparison of Manglish and Singlish Lexis in Blogs* (Master's thesis). Retrieved from http://studentsrepo.um.edu.my/5458/1/NADHIYA_TGB100045_A_COMPARISON_OF_MANGGLISH_%26_SINGLISH_LEXIS_IN_BLOGS.pdf
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shapes. In Atkinson, J. M., and J. Heritage (Eds.) *Structures of Social Action* (pp. 57-101). Cambridge: Cambridge University Press.
- Poplack, S. (1980). Sometimes I'll start a sentence in Spanish *y termino en espanol*: toward a typology of code-switching. *Linguistics*, 18, 581-618.
- Romain, S., and D. Lange. (1991). The use of *like* as a marker of reported speech and thought: a case of grammaticalization in progress. *American Speech*, 66(3), 227-279.
- Singapore Department of Statistics (2017). *Population Trends 2017*.
- Strauss, S., and Y. Kawanishi. (1996). Assessment strategies in Japanese, Korean, and American English. In Akatsuka, N., S. Iwasaki, and S. Strauss (Eds.) *Japanese/Korean Linguistics Vol. 5* (pp. 149-165). Stanford, CA: CSLI.
- Sumartono, F., and Y. Y. Tan. (2018). Juggling two languages: Malay-English bilinguals' code-switching behavior in Singapore. *The Linguistics Journal*, 12(1), 108-138.
- Tay, M. W. J. (1989). Code switching and code mixing as a communicative strategy in multilingual discourse. *World Englishes*, 8(3), 407-417.

付録: 文字化の表記方法

(0.5)	0.5 秒の沈黙	h	呼気音
(.)	0.2 秒以下の間合い	.h	吸気音
(())	注記	¥ ¥	笑いながら発話が産出されている部分
-	音が途切れている部分	[]	発話が重なっている部分
:	音が伸ばされている部分	[nidone:d]	前の語の発音 (IPA)
=	間がなくつながっている部分		

Amber CHEW (シンガポール南洋理工大学大学院生・大阪大学卒業生)
amberchewsihui@gmail.com